

大学生アスリートにおける競技能力とライフスキルの関係

The study of the relationship between competition level and life skills
in the university student athletes.

1K06A105

指導教員 主査 堀野博幸先生

坂浦 雄飛

副査 岡浩一朗先生

序論

スポーツを離れた日常生活場面において必要となる心理的なスキルとして、ライフスキルがある。一方で、スポーツ場面において発揮されるメンタルスキルとして心理的競技能力(徳永 1984)や、競技社会的スキル(杉山 2001)などが挙げられている。近年の研究では、アスリートの競技レベルの向上に伴い、心理的競技能力やライフスキルが向上していくと報告されている(和田ら 2001)。だが一方で津田(2007)が「多くの大学ではスポーツ推薦者に大学生としての認識は、一般学生とある種の隔たりがあり、十分な授業の展開は現実的難しい」と指摘するように、競技に没頭することが学業等その他の活動の妨げになっていることも珍しくないように思われる。そこで本研究では本学の大学生アスリートのスポーツ場面および日常場面でのライフスキルの獲得状況の実態を明らかにし、競技能力による差の有無を検証する。

実験 1

1 目的 実験 1 では競技レベルごとにスポーツ場面および日常場面のライフスキルの値を比較する。

2 方法 調査対象 早稲田大学スポーツ科学部の学生 283 名(男性 187 名,女性 95 名・不明 1 名:年齢 20.3 ± 1.1 歳)

調査内容 島本・石井(2006)の「日常生活スキル尺度(大学生版)」を利用、スポーツ場面とスポーツ以外の場面でのライフスキル得点を比較。

3 結果 対象を日本代表群,体育会群,サークル群に群分けし比較した結果,「スポーツ場面におけるライフスキル」では,リーダーシップ,計画性,情報要約力において日本代表群とサークル群に,自尊心において日本代表群とサークル群,及び日本代表群と体育会群に,対人マナーにおいては体育会群とサークル群に 5%水準で有意差が認められた。また日本代表群においてはリーダーシップと計画性において 1%水準で,情報要約力において 5%水準で,「スポーツ場面におけるライフスキル」が「スポーツ以外の場面におけるライフスキル」に対して有意に高い得点を示した。

実験 2

1 目的 実験 2 では,大学生アスリートの心理的競技能力を多面的に測る新たな尺度を開発する。

2 方法 調査対象 実験 1 に同じ

調査内容 島本・石井の「日常生活スキル尺度(大学生版)」と上野・中込の「競技状況スキル尺度」を組み合わせた「スポーツ場面におけるライフスキル」に関する 48 項目について探索的因子分析を行った。

3 結果 各因子につき 3 項目ずつの項目が含まれる 11 因子を抽出した。それらの因子は全分散の 65.8%を説明し,係数は.896 を示した。各因子は目標設定能力,コンディショニング能力,リーダーシップ,対人マナー,自己開示能力,肯定的思考力,チーム貢献思考,チームメイトとの協力性,感受性,自尊心,計画性と命名した。

この尺度作りの土台となった「日常生活スキル尺度(大学生版)」に比べ,よりスポーツ場面に特化した新たな尺度となり,今回これを「心理的競技スキル尺度(大学生版)」と命名した.

本研究のまとめと今後の課題

大学生アスリートは競技能力が上がるに従って,より高レベルな心理的競技能力を有することが概ね認められたといえるが,残念ながらそれらは日常生活には活かされていないことが本研究によって明らかになった.実験 2 で作成された「心理的競技スキル尺度(大学生版)」に関しては,今後信頼性の検証などを経て実用性のある尺度にしていく必要がある.スポーツ選手の心理的競技能力を多面的かつ的確に測定し,それらがどのような日常生活のライフスキルに転用できるかを明らかにすることが目下の課題といえるだろう.